

2006年3月6日
主催 (財) ミズノスポーツ振興会

「2005年度 ミズノ スポーツライター賞」受賞者決定

財団法人ミズノスポーツ振興会（会長：水野正人 ミズノ(株)社長）では、'90年度より「ミズノ スポーツライター賞」を制定し、スポーツに関する報道・評論およびノンフィクション等を対象として、優秀な作品とその著者を顕彰しています。

3月6日、高輪プリンスホテルで2005年度 選考委員会を開き、受賞作品および受賞者を以下の通り決定いたしました。

【ミズノ スポーツライター賞 最優秀賞】（トロフィー、副賞 賞金100万円）

- ・「オシムの言葉」 木村 元彦 （集英社インターナショナル）

【ミズノ スポーツライター賞 優秀賞】（トロフィー、副賞 賞金各50万円）

- ・「甲子園への遺言～伝説の打撃コーチ高島導宏の生涯」
門田 隆将 （講談社）
- ・「球界再編は終わらない」
日本経済新聞社編

詳細は別記の通りです。

(お問合せ先)

(財) ミズノスポーツ振興会 事務局	内橋	TEL: 03 (3233) 7009
ミズノ東京広報課	澤井・木水	TEL: 03 (3233) 7037
ミズノ大阪広報課	高橋・土師	TEL: 06 (6614) 8373

記

名 称：2005年度 ミズノ スポーツライター賞

制 定 目 的：スポーツに関する優秀な作品とその著者（個人またはグループ）を顕彰してスポーツ文化の発展とスポーツ界の飛躍を期待するとともに、これからの若手スポーツライターの励みになる事を願い制定

選 考 対 象：主として新聞・雑誌・単行本などを通じて書かれたスポーツ分野の報道・評論・ノンフィクション等で、当該年度に発表されたもの

選 考 委 員：委員長 岡崎 満義 氏（元文藝春秋社取締役、「ナンバー」初代編集長）
委 員 杉 山 茂 氏（スポーツプロデューサー、
元NHK報道センター長）

〃 村上 龍 氏（作家）

〃 ゼッターランド ヨーコ氏（スポーツキャスター）

〃 水野 正人 氏（(財)ミズノスポーツ振興会会長、ミズノ(株)社長）

※順不同

対 象 者：日本人および日本在住の外国人

受賞者及び選考理由：

● 「オシムの言葉」（集英社インターナショナル）

木村 元彦(きむら ゆきひこ)

2003年1月にジェフ・ユナイテッド市原の監督に就任したイビツァ・オシムは、年間予算がJリーグ最低、代表選手もおらず、常に降格の瀬戸際にあったチームを見違えるように強くしたばかりでなく、その独特の「語録」でも知られるようになった。

オシムが監督に就任したとき、選手たちは「何だ？ この監督は？」といぶかった。「挨拶？ そんなもの要らない」。練習は始めから「走れ、走れ」のトップギア。「君たちはプロだ。休むのはオフになってから、引退してからで十分だ」。そして、「いわれたことだけじゃ駄目だ。自分で考えろ」。不満と戸惑いが広がっていった。だが、試合になるとチームは勝つ。「近代サッカーは走らない選手、足の遅い選手は駄目だ」というオシムの信念が結果で証明され、2005年ヤマザキ・ナビスコカップではジェフ千葉に初のタイトルをもたらした。

本書は、そのオシムの指導ぶり、特にその言葉を紹介し、さらに稀有なサッカー監督であるイビツァ・オシムという人物がどのようにして形成されてきたのかを丹念に追っている。オシムは1941年5月にボスニアのサラエボで生まれた。小さい頃から頭脳明晰で数学者になりたかったというが、家庭の事情からプロサッカー選手となり、サラエボの小さなクラブからフランス・リーグへ渡る。帰国して監督となり、86年にはユーゴスラビア代表監督に就任した。

本書は3つのことを教えてくれる。第1にサッカーにおける監督の役割。サッカーというゲームの面白さがどこにあるのかが改めて示され、それを最大限に引き出すことができるのが本物の監督だということが理解できた。第2にオシムという希有な人物の半生記を

通じて、国家と個人ののっぴきならない葛藤を考えさせられる。民族対立のすさまじさには慄然とさせられるが、それを超える力としてスポーツにかすかな希望を感じ取ることができる。本書はすぐれたサッカー指揮官の伝記である以上に、文化人類学的フィールド・スタディの書であるとも言える。

そして第3に「言葉の力」。オシムの繰り出す言葉が選手の身体に入っていく、現実を動かしていく。深刻な対立の中でユーモアが果たす重要な役割が見えてくる。そこで忘れてならないのが通訳の間瀬秀一である。かれこそ「言葉の力」をもっともよく理解している、オシムの言葉の「助産夫」に違いない。本書はこの3つのテーマが相互に補い合いながら展開され、リスクをあえて引き受けて自分なりの人生をつくっていくことにこそ生きる意味があるというメッセージが浮かび上がる。

構成が巧みで文章にリズムがあり、情景描写も的確で読みやすい。

●「甲子園への遺言～伝説の打撃コーチ高島導宏の生涯」 (講談社)

門田 隆将(かどた りゅうしょう)

約30年にわたって7つの球団で打撃コーチをつとめ、現在MLBで活躍する田口壮をはじめ、数々のプロ野球首位打者を育て上げた名コーチは、50代半ばにして一念発起、高校野球の指導をこころざし、通信教育で教員免許を取得して、59歳の新人教師として福岡県の私立筑紫台高校の教壇に立つ。しかし、「甲子園で全国制覇」という彼の抱いた新たな希望は、すい臓癌という病魔によって道半ばで奪い取られてしまった。

六大学、社会人野球を経て、期待されて鶴岡監督時代の南海に入ったが、現役生活は5年。肩の脱臼に苦しみ、野村監督のもと28歳で打撃コーチになった。選手として短命に終わりながらも、30人ものタイトルホルダーを育て上げたコーチとして花開くことになったのは、その独自の観察眼や指導法、誰からも慕われる人柄ゆえのことだった。

高島の大学の後輩でもあり、最後の本を託されていたという著者はまだ時間があると思いつき、プロ野球界で多年にわたって活躍しながらなぜ最後に高校野球に帰っていったのか、その思いを直接聞くことはできなかった。著者は、高島の『遺言』を探そうと多くの人に会い、それが本書となって結実した。

高島の生き方を伝えたいという熱い思いが本書にはこめられており、その思いに裏打ちされるように、著者は実に多くの人から取材し、また過去の週刊誌、新聞記事なども丹念に渉猟している。古くからの友人、選手時代、コーチ時代と渡り歩いたチームや筑紫台高校の関係者、そして何よりも彼の指導を受けた選手や教師としての彼の教え子となる高校生たちなどから、高島の人となり伝える多くの「証言」を得ている。

また、高島の打撃コーチとしての力量が伝わってくる数々のユニークな指導法が非常に面白い。日本のプロ野球初の「戦略コーチ」として綿密にデータを集め、相手投手の癖と配球から球種をみやぶることを徹底して説き、個々の打者に応じたきめの細かい指導をしてきた高島であるが、バットを投げる練習、ボールの底を切って真上に打ち上げる練習など、誰もがあつとおどろくような奇想天外の方法で、バッティングに必要なタイミングのとりかたや様々な状況に対応できる技術を会得させている。

方法のユニークさだけでなく、選手をほめまくる、単に欠点を指摘するのではなく、その原因を指摘した上でそれをなおすにはどうしたらいいかまでいっしょに考えるというコーチン

グは教育論としても参考になるものであろう。

これら、高島が通りいっぺんの打撃コーチでないことを伝えるいくつかの記述から、小久保（ダイエーから巨人）が「（高さんは）野球を通じて、“人間力”を高めるとい根本を僕たちに教えようとしていたと思う」という、単なる技術コーチではない、人を育てた教育者、高島が無理なく読者に見えてくる。

監督論や、監督の書いた本また監督を描いた著作は多い。しかし、日々選手と密に接し、選手を育てる存在であるコーチについての著作は少ない。日常の報道ではなかなか見えてこない、地味な存在であるコーチが実はいかに大きいのか、それを丹念な取材で掘り起こした点でも、本書の価値がある。

● 「球界再編は終わらない」

日本経済新聞社編

2004年6月「近鉄がオリックスに譲渡交渉」の新聞報道から始まった球界再編劇は、かねてから水面下で進んでいた「1リーグ制」構想を浮上させ、国民的な論議を巻き起こした。球団数を削減したいオーナーと、一方的な決定と反発する選手会との対立は、ついにストライキ突入という事態となる。世論が選手会に同情的な傾向を見せる中、「新規参入組」として、まずライブドアが名乗りを上げたものの、結局はライバルの楽天が仙台に新球団を立ち上げる。他方でダイエーは紆余曲折の末にソフトバンクが支えることになり、1リーグ構想は頓挫して何とか2リーグ制は維持されることになった。とはいえ、プロ野球の経営を巡る根本的な課題は何一つ解決されたわけではない。球界再編は終わらず、これからまた新たな模索が始まるというのが本書の流れである。

一連のめまぐるしい展開は、同時進行で伝えられる当時の新聞報道などではよく理解できない人が多かったと思われるが、本書は経済紙の記者が組織的に取材をしてまとめただけに、球団統合と1リーグ制への移行を必至と考えていた渡辺恒雄氏らオーナー側が描いたシナリオや舞台裏の動き、人間模様事者の経済界でのつながりなどを丹念に掘り起こしており、全体像が見えてくる。冒頭の導入部に紹介される近鉄の命名権売却案のお話も、本当の狙いは球団経営の苦境を知らしめることにあったというストーリー展開はなるほどと思わせる説明であり、楽天・三木谷社長に関する「『後出しじゃんけん』の真相」の項もいい。三木谷社長は早くに球界のある重鎮から近鉄買収を打診されたが、赤字の大きさにあきらめ、楽天執行役員の小沢隆生が知人の選手会顧問弁護士・石渡進介をライブドア・堀江貴文社長に紹介して、ライブドアが新球団に名乗りを上げる展開になったという。三木谷は状況の変化で球界進出を決意、結果的に「後出し」の汚名を着たというのだ。歴史的なできごとの貴重な記録として評価できる。楽天やソフトバンクのような新規参入企業の勝算についても、企業の業績を踏まえて的確に分析しており、「プロ野球経済学」としても興味深い読み物になっている。

以上